
自傷癖

北川瑞山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自傷癖

【Nコード】

N6117S

【作者名】

北川瑞山

【あらすじ】

貴子は物質的な価値観の中に生きていた。時折原因不明の皮膚の痒みに襲われながら。突如貴子の身に訪れた悲劇は、彼女を新たな人生へと駆り立てる。自身の痒みの正体を知り、再び貴子は順風満帆な生活を手に入れるが・・・。

女性の「幸福」の如何に難解であるかを問うた小説。

第一章

貴子は実に嫉妬深い。その嫉妬深さは、まるで男のそれである。それもそのはず、貴子の幸福観は男性的、というよりもはや男であると言っている。「負けず嫌い」の一言で済ませられるものでは到底ない。勝つ事にしか価値を見出せない。故に評価の基準が曖昧であるもの、例えば芸術と言われるものは全てその代表格であろうが、不幸不幸という類いのもの、美醜、あるいは善悪というもの、そういったものにはおおよそ興味が無い。あくまで定量的な評価の出来るものにしか関心を向ける事が出来ないのである。貴子の嫉妬深さは、客観的に勝敗を判断できる価値を追求したが故のことであろう。そういう思考の持ち主であったから、その思考が極めて論理的であった事は言うまでもない。貴子の半生を一言で言い表すとすれば、「無機質」という言葉が最も適当ではないかと思われる。おおよそ「理性的」という言葉では収まりきらないほどの面白みのなさである。それは例えば貴子の恋愛観に如実に表れている。貴子の恋愛観とは「女の役割は優秀な遺伝子を遺すことである」

という一言に尽きる。女の犯す罪悪の中で、下らぬ男を立てることほど悪辣なものはないと考えているのである。そういう徹底した理性が全身から滲み出ていたせい、男は皆貴子に近寄らなかつた。それほどに、男というものは女の理性を恐れているのである。そんな理性に否定されてしまったら、男は自分の存在価値のなさを証明されてしまうからである。もつともこれも貴子の計算の内、男はある程度の年齢に達するまではその真価が分からないものであるから、若いうちに恋愛などしても仕方がないという思いが働いていた。そういう訳で、貴子は大学を卒業するまで、恋愛というものをしたことになかった。貴子は東京大学の医学部を出て、すぐに智彦という大学の同級生と結婚した。智彦の家系は代々医師の家系であり、彼はその一家が経営する私立病院の跡取り息子であった。その後、

智彦と貴子の間には男の子が生まれた。淳一と名付けた。意外にも、貴子は子供が生まれると良妻賢母となり、温かな家庭を築いた。

仕事も家庭も順調で、順風満帆と言つて良い貴子の人生であつたが、貴子には悩みがあつた。これがそれまでの半生を通して貴子を悩ませたものであつた。それは全身の皮膚の痒みである。不定期に全身に湿疹が起こり、突如激しい痒みが貴子を襲うのである。しかも原因不明である。貴子の専門は皮膚科であつたが、その貴子ですら全く原因が分らない。薬を塗つたり飲んだりしても効果がなかったし、血液検査をしてもアレルギー体質といったものは検出できなかった。その強烈な痒みが初めて貴子を襲つたのは、大学に入学した春であつた。それまでも度々発症してはいたが、それまでとは比べ物にならないほどの痒みを覚え、全身から血を流すまでに至つた。どんな治療にも効果がないので、掻くしかない。痒い所を掻く事ほどの快樂はなく、無心に掻き続ける。そうして全身が引つ掻き傷にまみれてそれ以上掻けなくなると、貴子は全身に熱湯を浴びた。その間は痒みなど忘れられた。いや、痒みなどない普通の状態以上に快適であつた。悩みなどと言う憂鬱な感情は胸奥から吹き飛び、心が躁状態にまで駆け上がるほどの快感であつた。もつとも、その代償は高くつく。その行為が終わるや否や、再び全身を鞭打つ様な痒みが貴子を襲うのである。全身に虫が這う様な感覚に貴子は夜も眠れず、皮膚を傷つけ、熱湯をかぶりを繰り返していた。

それが急に治まつたのは、大学生活に慣れて来た五月頃の事であつた。それまでの痒みが嘘の様にピタリと治まり、滑らかな素肌が貴子に戻つた。それ以来大学を卒業するまで貴子の肌は平穩を保つた。

だが、貴子が大学を卒業し、智彦と結婚すると、また同じ様な痒みが貴子の全身を駆け巡つた。智彦は頭脳、容姿、家柄などどこを取つても非の打ち所のない男であつたし、そういう男と結婚できた貴子も幸福の絶頂であつた。だがその痒みは貴子をそこから引きずり降ろした。頭皮からつま先に至るまで全身という全身が貴子をそ

の幸福から引き剥がしたのである。二人の新婚生活はこのお陰で惨憺たるものに終わった。そしてようやく貴子の痒みが治まった頃には、二人の夫婦仲は既に冷めきっており、とても結婚当初の様な甘い感情を抱けない有様であった。

また、貴子と智彦の間に淳一が生まれると、貴子は息子を溺愛する様になった。というのも、その頃この一家には貴子を排除する空気が流れていたのである。原因は智彦の母親であった。嫁姑の争いとは良くある事だが、この一家でもそれは如実に現れていた。智彦の母親は何かにつけて貴子の一挙手一投足をあげつらい、非難するところが貴子は持ち前の論理性から悉くこれを論破してしまう。気に入らない母親は、智彦を始め、一家のあらゆる人間に貴子の素行の悪さを吹聴して回った。こうして貴子は四面楚歌の状況に陥った。智彦は家の外では優秀な人間であったが、家族や親類の前では飼った猫の様に無力であり、こうした状況の貴子を救う事は出来なかった。こうした中で、貴子にとって唯一の希望は淳一ただ一人であった。貴子が教育熱心で優しい母親であったのはこうした背景によるものである。しかし、淳一が生まれてからすぐ、貴子に例の痒みが再び訪れた。そのためこのようやく得た淳一という頼みの綱に、貴子は母乳を与える事が出来なかったし、満足に抱いてやる事も出来なかった。抱けば痒みがその威力を増し、針の筵の様に全身を突き刺すのである。そしてそれが治まったのは淳一がもう一人で歩ける様になった頃の事であったから、この痒みは殊更長く続いたという事になる。

このように、貴子は度々原因不明の痒みに襲われて来たが、それはその度に貴子の幸福を嘲笑うかの様に貴子を地獄に突き落とし、その幸福を奪って来た。貴子はこの奇妙な体質を恨んだ。しかし恨んだところでどうにもならない。気持ちの切り替えの速い貴子は、自分が幸福になれないのなら、それを息子に託すまで、という考えに切り替えた。貴子は教育熱心で、また淳一の自主性を重んじ、常に淳一の第一の理解者足り得る様に努めた。時折智彦の母親が淳一

の教育方針について口を出して来たが、貴子はそれに一切耳を傾けなかった。自分でさえ一家の伝統を重んじる事を強要され窮屈な思いをしているのに、増してそれを子供に押し付けたらどれほどの強迫観念を植え付ける事になるうか。そう考え、貴子は淳一の気持ちを尊重し、それでいて身につけるべき教養や論理構築力などの普遍的能力を養えるよう、淳一がまだ幼い頃から徹底的に鍛え上げた。

そうした教育の成果もあり、淳一は聡明な子に育った。子供の聡明さとは、教育に当たる人間の気持ちの強さから生まれるのであろう。曖昧な教育方針しか持ち得ない者が結局は放任主義の愚に陥り、事実上の教育放棄をしてしまう様に、教育者によほど一本筋の通った哲学がなければ、教育は方向性を失ってしまうものである。教育とはおおよそそういう哲学を教える事であるらしい。その意味で、貴子は良き教育者であつたと言つて良いであらう。自身の生き方が既に初志貫徹しているのであるから、それを教える事に何の無理もなかった。苦勞した事と言えば、自分の教育方針に不純物が混ざらぬよう、一家の誰にも口出しをさせなかつた事である。父親である智彦にすら、一切の口出しをさせなかつた。貴子にとって、智彦は今や弱い男であつた。どれだけ優秀であらうとも、自分の家族を守れない男など取るに足らない男であると、貴子は考えていた。これは結婚前には思いもよらなかつた貴子の誤算であつた。もつとも貴子にとって男など良き精子の提供者であればそれで良く、その役割を果たした今となつては既に用済みであつたから、そんな事には気にもしなかつた。ともかく貴子の意識は淳一に集中し、そんな淳一は母親思ひの真面目で聡明な人間に育つていたのである。

そんな淳一も、小学校に入学し集団生活を送る様になつた。教育に不純物が混ざらぬよう注意を払つて来た貴子だったが、とは言え淳一を学校に行かせない訳にも行かず、比較的質の高い教師と児童がいるであらう私立の小学校に通わせた。この国においては比類のないほどの名門校であつたので、学科試験、体力測定はもとより面接で家柄や家庭の収入まで問われる厳しい入学試験が行われたが、

淳一は難なくこれを通過した。そんな名門小学校の中でも淳一の成績はトップクラスであり、将来を嘱望される存在であった。淳一は何よりも負ける事が嫌いで、負けると必ず自分より優れた者を嫉妬した。それが故に淳一は自らを律し、勝つための努力をすることに余念がなかった。貴子の教育の賜物であろう。貴子はそんな淳一が誇らしく、唯一の生き甲斐となっていた。自らの分身とも言える淳一さえいれば、貴子は幸福を感じる事が出来たのである。

が、貴子の教育が実を結び始めた頃、また例の痒みが襲って来た。神出鬼没のこの痒みが、またしても貴子の幸福を奪おうとしていた。全身の皮膚という皮膚、眼球の奥、耳の鼓膜、乳房の裏側、肛門の中まで痒い。貴子は暫くの間この痒みに絶叫し、悶絶した。こうした常軌を逸した様子のために、貴子は増々一家において孤立した存在となった。

ここまで来れば、貴子も薄々は気付き始めていた。世に言う幸福という状態になるほど、体が痒くなるのだと。思えば、貴子が痒みを癒すために行っていた、引っ掻く、熱湯を浴びるといった所謂自傷行為は、物質的幸福を代償に精神的幸福を得る行為である。医学的には全く説明がつかないものの、物質的幸福を求めすぎたが故に、このような体質になってしまったのかも知れない。と貴子は考えた。もともと、貴子はそれまで幸不幸などという概念に興味はなかったが、自分の求めて来た物が恐らくは物質的幸福という事になり、それと釣り合う精神的幸福を得んが為に全身が痒みを発しているのではないかという推論に辿り着いた。だがそうだとすれば、この痒みを発しているものの正体とは何なのか？そこまで来ると貴子にはとんと答えが出なかった。

その推論を裏付けるかの様に、次の不幸が訪れると貴子の痒みは潮が引く様に消えていった。恐らく、この不幸は貴子の人生で最も悲惨な事件だったに違いない。

第二章

淳一がある日学校から帰つてくると、半ズボンからのぞく脚に無数の痣があつた。その日は休診日で居間にいた貴子は、すぐにそれに気付いて声をかけた。

「脚の痣、どうしたの？」

淳一は殆ど気にもかけない様子で、

「何でもないよ。ちよつと怪我しちゃっただけ」

と言つた。貴子はそんな淳一の様子が逆に気になつた。

「怪我をしたのは見れば分かるわよ。その原因を聞いているの」
すると淳一は珍しく焦つて

「ちよつと転んだだけだよ。大した事ないから大丈夫」

と、見え見えの嘘をついた。

「転んだだけでそんなに沢山痣はできないわよ。それに大した事がないかどうかはその理由に因るわ」

貴子がそう言つと、淳一は下を向いて黙ってしまった。貴子は淳一の手を両手で包んで優しく言つた。

「淳一、事實は事實のまま話さなきゃ駄目よ。勿論話したくないのならそれもあなたの権利。自己主張はあくまで正直にしなさい」
それ以降、淳一は伏し目がちにぼつりぼつりと話した。

淳一の話によればこうである。学校で行われた試験の答案返却の後で、あるクラスメイトが淳一のそばまで寄つて来てこう言つた。

「淳一君、テストの結果どうだった？」

淳一の試験の結果はいつも通り、ほぼ満点に近い点数であつた。

「ああ、まあまあかな」

と、淳一は答えた。

「またそんな事言つて。どうせ良い点数なんだろ。俺の点数も教えるから、教えてよ」

このクラスメイトはどうやら淳一に対して対抗心を燃やしているら

しかった。淳一の試験の結果が知りたくてしょうがない様子である。しかし淳一もさる者である。ほぼ満点を取っている自分が負けている可能性は殆どないし、それ以前に自分が意識もしていない相手が自分に対抗心を燃やしている事が、既に淳一の自尊心を満たしていた。

「いいよ。人と比べてどうかじゃないだろ」

と言った淳一の微笑に、勝者の驕りが見られた。クラスメイトは敗北感に苛まれたようであった。こういったクラスメイトは、彼一人ではなかった。学年中の秀才が、挙って淳一のもとに試験の結果を聞きにくるのである。またその度に淳一は先と同じ様な対応をしていた。当然、と言うべきか、淳一は彼らの反感を買う様になった。

彼らも淳一同様、嫉妬深い性格なのであろう。更に言えば、彼らは勉強では勿論の事、運動やクラス内での人望、異性からの評判など、どこを取っても淳一に敵わなかった。そして極めつけは家柄である。この学校には代議士や弁護士、あるいは大物タレント等の子息が少なからずいたが、そういう者は大概苦労知らずであるため、大した努力をせず、勝利にも執着しない。淳一のもとに寄ってくる秀才達は、彼らに比べれば庶民的な家柄であり、その分実力では負けまいとする執念が強かったのである。ところが淳一にだけは家柄でも実力でも勝つ事が出来ない。この事が何より彼らの自尊心を傷つけた。彼らはまだ敗北の経験のない年頃であり精神的に未熟であったから、なおのことその怨念が深かった。そういう未熟な精神の矛先がどこへ向かうかと言えば、やはり自分よりも弱い者であった。秀才達は次第に群れる様になり、自分よりも学力、体力、容姿等において劣っている者をけなし、からかい始めた。しかもそれが徐々にエスカレートし、身体的暴力にまで及ぶ様になった。誰もこれを止める者はおらず、あろう事か教師まで見て見ぬ振りをしていた。クラスの不祥事を恐れる教師など何の抑止力にもならなかったのである。そんな矢先、淳一が彼らを窘めたのである。彼らが寄って集った一人のクラスメイトに嘲笑を浴びせていたところに落ち着き払った淳一

が一言、こう言った。

「やめろよ。見苦しいぞ」

この一言ほど彼らを絶望させたものはなかった。弱い者をいじめ抜くことで辛うじて保っていた彼らの自尊心を悉く粉碎したのである。自分が道徳心ですら淳一に敵わない事を思い知らされた絶望。それがどす黒い悪意に変わり淳一を襲うのにそう時間はかからなかった。ある日一人で下校していた淳一を、人気のない路上で複数の上級生達が襲った。どこの学校にも不良というのはいるもので、彼らは学校中で有名な落ちこぼれの集まりであった。淳一は彼らから殴る蹴るの暴行を加えられた。いつの間にか淳一と同年の秀才達がそれに加わっているのを見て、淳一は殴られながらもそれが彼らの差し金であろう事を察した。その後淳一は脇にある雑木林に連れ込まれ、全裸にされた上デジタルカメラで写真を撮られた。群れる事ほど思考を鈍らせるものはない。一人ではとても出来ぬであろう残虐の限りを、彼らはけたたましい笑いとともに行っていた。彼らは淳一に唾を吐き、

「チクつたら写真をネット上に公開するからな」

と捨て台詞を吐き、その場を立ち去ったと言う。

淳一は言葉少なにはあったが、涙一つ見せずにそれを語り終えた。貴子は終始黙っていたが、次第に口元の片側だけが上がる様な不気味な笑みを浮かべる様になった。こういう表情の貴子はおおよそ何を考えているのか分からない。生来の素質として彼女に秘められた攻撃性に火がついた瞬間であつたろう。

貴子は一応、智彦に首尾を報告した。もつとも貴子は助言を求めている訳ではない。報告をしなければ、後から一家に何を言われるか知れたものではないからである。智彦は憤慨した。

「学校側は何をやっているんだ。高い学費を払ってるんだ。最低限の教育を保障する義務がある。そんな輩のいる学校に淳一はやれない」

貴子は頷いた。

「そうね。でも非のない淳一が学校を辞めるのは間違っているわ。その連中を学校から退かせるべきよ」

智彦は

「ああ、分かっている。俺に任せろ。学校に電話を入れてやる」

と自信ありげに言った。智彦は勇敢な人間であつたが、元々人がいたため、性善説でものを思考する傾向にある。そんな智彦の発言を聞いて貴子は

（これだからお坊ちゃまは）

と思わずにいらなかった。貴子は冷静にこう返した。

「駄目よ。そんな事をして学校側に中途半端な対応をされたら、淳一がまたひどい仕打ちを受けるわ。もし本当に写真をネットに公開されでもしたら、淳一は一生残る心の傷を負う事になるのよ」

智彦は少し考える様な素振りで

「じゃあどうする？その悪ガキどもを退学させるのはあくまで学校側だ。学校側に訴える以外にそれをさせる手立てなどあるのか？」

貴子は苛立った。

（何を生温い）

やはりこの男には家族を守っていく能力などないのだと確信した。

「いいわ。この件に関しては私がどうにかする。口出しはしないでちょうだい」

貴子はそう言うのとさっと立ち上がり、その場を去ろうとした。

「おい、どうにかするって、どうするつもりだ？こういう事はきちんと話し合って…」

智彦が言い終わらないうちに、貴子は溜め息でそれを遮った。

「私にはね、あの子を守る義務があるの。のんびり話し合っているうちに取り返しのつかない事になったらどうするの？」

「のんびりなんかしてない。ただ大きな問題だから、最善の策を施さねばいかんと言ってるんだ」

「最善の策なんて必要ないわ。要は目的を果たせば良いだけ。私が目的を果たせなかった事なんてあるかしら？」

貴子が目尻をつり上げてそう言うと、智彦は黙ってしまった。貴子は颯爽と智彦の部屋から出て行った。

貴子は病院の広い廊下を歩いた。その表情に迷いの欠片もない。貴子は既に三十を超えていたが、大抵実年齢より若く見られる。貴子の引き締まった肢体が風を切る様に歩くと、見る者に凜とした印象を与える。その時の貴子には一層そういう風采があった。それは貴子の内に静かに燃える闘争心の表れであつたに違いない。

貴子がここまで闘争心を燃やした理由は、無論淳一のためであつたが、同時にそれは自身の幼い頃の記憶にもあつた。貴子は子供の頃から勝つ事に拘泥し、そのための努力を惜しまない性格であつた。そのお陰で貴子は学校の中ではどの分野においても飛び抜けて優秀であつた。だが、そんな貴子はいつも集団から遠ざけられた。何か特別悪態をつかれた訳ではなかつたが、その場の「空気」とでも言うべきものが貴子を集団から排斥し、近づく事を許さなかつたのである。貴子はそのせいで絶えず心中に孤独を抱いていた。貴子の周囲の人間は、

「貴子ちゃんは何でも出来ていいわね」

等と言つて貴子の孤独を分かうともしなかつたし、教師の行う授業などはおおよそごく平均的な大多数の生徒に向けられており、貴子のためではなかつた。いかなる時も「出来て当たり前」の貴子を誰も応援してはくれなかつたのである。そういった日常が貴子を一層孤独にした。まるで自分だけが違う世界の住人の様に感じていた。そういった幼少時代を経て、貴子が描いた集団の性質とは次の様なものであつた。集団はおおよそ一割の劣等生、八割の凡人、一割の優等生で構成されている。それは中央が大きく盛り上がった標準偏差で表される。その標準偏差の両端の人間を、中央の人間が排斥する。中間層の人間は自分より弱い者を力で、強い者を数でねじ伏せ、自己の正当性を主張して止まない。そういう集団の性質を、貴子は激しく嫌悪していた。自分の生き写しである淳一にも同じくその「集団の論理」が降り掛かつて来ているのであろうと思うと、余計に

貴子の復讐心は勢を増すのである。

貴子は淳一から主犯格と見られる同級生の名前を聞いていた。青木という少年だった。その名前を聞いてすぐ、貴子にはすぐに顔が思い浮かんだ。青木は一度、複数の友人に混ざり淳一の家に遊びに来た事があり、貴子に挨拶をした事もあった。その人懐っこそうな笑顔からは、とても先の様な悪事を働く邪気は感じられなかった。が、貴子は妙に納得していた。卑劣な者ほど所謂善人の顔をしている。群れる事を処世術とする者にとって、その人当たりの良さが最大の武器なのである。と、経験上貴子はそのような卑怯者の特性を理解していた。

第三章

ある日の午後、良く晴れた空の下、淳一の通う小学校の駐車場に貴子の運転するBMWが止まっていた。この界限ではこのような高級車は珍しくない。小学校の駐車場には他にもベンツ、ボルボといった高級車がずらりと並んでおり、まるで何かのモーターショーの様な華やかさである。当然警備も厳重であるが、車の中にいる貴子には警備の目は向けられていない。そろそろ生徒達の下校の時刻である。青天を映し出すフロントガラスの奥で、貴子はぞろぞろと出てくる小学生達を注意深く目で追っていた。切れ長の目が落ち着き、呼吸は静かで規則正しい。が、手はハンドルを硬く握りしめている。校門付近をはしゃぎながら歩き通り過ぎる小学生の群れの中、一人とぼとぼと歩く淳一の姿が貴子の目に留まった。

（淳一…）

貴子は瞬きをし、淳一をそのまま見送った。貴子の目的は淳一ではない。青木である。貴子は青木への報復のため、ここで青木を待ち伏せているのである。貴子の心に迷いはないものの、淳一の姿を認めた時には胸が締め付けられる様な感覚を覚えた。母親がここで待ち伏せをしている事などつゆ知らず一人で下校する淳一の背中を見て、「淳一を守らねば」という使命感と、「淳一に黙ってここへ来てしまった」という罪悪感が複雑に貴子の中で混じり合った。もともとそれで怯んでしまう貴子ではなかった。復讐の炎は未だ貴子の中で燃え盛っているのである。

淳一が校門を通り抜けてから二十分ほど経った頃、六人の小学生の集団が何やら笑い声をあげながら貴子の目の前を通り過ぎた。彼らの中に見覚えのある顔が混じっている。その中に、紛れもない青木の顔があった。坊ちゃん刈りで色の黒い、狐目といったかなり印象的な容貌である。屈託のないその笑顔も、貴子の目にはこの上なく下品な皺の塊に映った。憎しみを押さえつつ、彼らの姿が見えな

くなるまで、貴子はその場を動かなかった。

青木を含むその集団が日の当たらない路地に入りその半ばまで来たとき、後ろから来た貴子の車とその集団を追い越していった。勿論それが淳一の母親の運転する車であろうとは、青木を含め誰も気が付かない。車は路地の向こうの交差点で右折し、見えなくなった。青木達がその交差点に辿り着くと、その集団のうち三人は青木と分かかれ、青木を含む残り三人は談笑しながら別の道を歩いていった。

暫く三人が歩いていると、そこにまた貴子の車が止まっていた。三人は特に気にもせず、そこを通過していく。貴子は三人が突き当たりの丁字路で曲がって見えなくなるまでそれを見届け、次の瞬間また車を走らせた。貴子の車が丁字路を曲がる時、丁度青木がその他の二人と別れるところであった。貴子はそれを見届けると、二人と別れた青木を追い越して路地の左側に車を止めた。貴子はバックミラーで青木がこちらに一人で歩いてくる事を確認する。青木は何も知らずに貴子の車の脇を通り過ぎようとした。その時、車の助手席のドアが開き、青木の行く手を阻んだ。通行人の一人もいない、閑静な住宅街の一角で、青木は悲鳴をあげる間もなく車から伸びて来た白い手に引きずり込まれた。

助手席のドアが素早く閉まると、状況の飲み込めない青木は貴子の顔を見つめた。恐怖で固まった青木の目は、静止画の様に焦点が動かなかった。貴子は右手で青木の髪を引っ掴むなり、穏やかな口調でこう言った。

「淳一の写真、持ってるわよね？よこしなさい」

青木は口を半開きにして恐れ戦き、言葉も出ない。すると貴子の左手の拳が勢い良く青木の腹部に命中した。青木は口の中で嘔吐した。自己防衛本能に従って群れ、異物を排除する者には本能に訴えるしかない。貴子の暴力はその為の手段であった。

「聞こえた？」

貴子が言うなり青木は慌てて、

「出します。出しますから」

とうわずった声で叫んだ。青木はバッグからデジタルカメラを取り出した。貴子は内心安堵していた。青木がカメラを自宅に保管していた場合、「渡さないと学校に連絡する」と脅し家にまで取りにいさせる予定だったが、どうやらその必要はないらしい。貴子は青木からデジタルカメラをひったくると、中の写真を確認した。するとそこには雑草の生い茂る黒い土の上に倒された、全裸の淳一の姿があった。淳一の手足は上級生達に押さえ付けられ、目は虚ろに天を仰ぎ、表情には望みを捨てた様な脱力感があつた。同じ様な写真が念入りに何枚も撮られている。貴子は吐き気を催し、反射的に隣にいる青木の腹部を裏拳で殴った。青木は

「うおえっ！」

という声を上げ、シートの上でうずくまり、嗚咽しだした。貴子は眉間に皺を寄せ、歯を食いしばり、青木を睨んだ。貴子にはこの青木という少年が、もはや人間には見えなかった。「餓鬼」という言葉が相応しく思えた。貴子は青木の肩に手を回し、「これをやった人の名前を一人残らず言いなさい。一人でも言い残してごらんなさい。この事を学校に報告するわよ。そうしたらあなたは退学ね」

と脅した。「退学」という言葉に青木は一瞬ピクツと反応した。その後青木は俯いたままおずおずとその者達の名前を次々に挙げた。貴子はそれを密かに録音機で記録していた。これで全て証拠が揃った訳である。

その後、貴子は突き放す様に青木を解放し、車で走り去っていった。残された青木は暫く呆然としていたが、やがてとぼとぼと帰路についた。青木にはこの出来事を親に報告する事が出来なかった。自分の悪事が親に知れてしまう事を恐れた為である。しかしそれはすぐに知れてしまう事になる。没収したカメラや青木の証言の入った録音機を証拠として、貴子が学校側に訴えたのである。これには学校側も言い逃れのしようがなく、下手な対応をしようものなら裁判沙汰にまで発展しかねない状況を悟った。結果青木をはじめ淳一

を痛めつけた生徒は一人残らず退学処分となった。勿論、貴子が青木に暴力を振るった事も同時に明るみに出た。退学になった生徒の親達はその暴力を非難したが、貴子は悉くこれを論破した。自分の行いが報復行為でなく、あくまで名誉を毀損される事を事前に阻止した正当防衛である事を主張したのである。またそういう親達も自分の息子の醜聞が広まる事を恐れ、貴子の暴力に対し法的手段に訴える事はできなかった。

貴子はどうして目的を果たした。が、悲劇はここからである。貴子がこの一件に決着を付けた一週間後、淳一は自室のクローゼットで首を吊って死んでいた。淳一、僅か八歳であった。遺体のそばには、こんな手紙が遺されていた。

*

お母さん。ありがとう。お母さんはいつも僕の事を一番に考えてくれていた。お母さんは僕を助けてくれた。普通の大人ならあんな事はしないと思う。でもお母さんはそれをやった。そんな大人は僕の周りにお母さんしかいなかった。みんなが見て見ぬふりをしている中で、本当にすごい事だと思う。でも僕はお母さんのように強くなれない。僕はお母さんがいないと生きていけないんだ。僕は一人で何も出来ない、自分の弱さがいやだ。自分が情けない。だから僕が死ぬのは僕のせいだ。誰も責めないでほしい。そして弱い僕を許してほしい。本当にごめんなさい。さようなら。

淳一

第四章

言うまでもなく、貴子は悲嘆に暮れた。一生分の涙を流した。貴子はこれまで人前ではおるか、一人の時には涙は流したことはない。だがこの時ばかりは、四六時中大声を出して号泣した。淳一の葬儀の時など、棺の前で突然泣き叫び、その場に崩れ落ちた。そこから二度と立ち上がれない様な絶望で、危うく貴子は気を失いかけた。その後もどす黒い目眩が度々貴子を襲い、その度に貴子はこの現実が夢であることを願った。この悪夢から覚めて欲しい、淳一に再び自分のもとに駆け寄ってきて欲しい、という期待を捨て切れずにいた。

そうして涙も希望も枯れた頃、貴子は自分の愚かさを呪った。復讐によつては、人の心の傷は癒えないのだ。自分が復讐をしたところで、淳一が喪失した自信は戻らなかったのだ。戻らないばかりか、更に遠のかせてしてしまった。それなのに自分は「淳一の為」等と言つて復讐を企て、実行した。だが今思えば、それは他ならぬ自分の為ではなかったか。淳一を守る為ではなく、淳一を守る義務を背負った自分の為ではないか。貴子はそう考えた。そしてその考えを裏付けるものは貴子の例の痒みであつた。以前の推論によれば、精神的幸福が物質的幸福に追いつかない時、貴子の体は痒みを發してそれを欲するはずである。だが精神的にどん底であるはずのその時の貴子には全く痒みがなかった。その理由は一つしか考えられない。貴子にとって、淳一は物質的幸福でもあつたという事である。家や車と同じ、物質的幸福。それは偏に他人と比較する為の幸福である。つまり貴子にとって淳一は淳一本人の為の存在ではなく、自分の虚栄心を満たす為の存在であつたということである。だからこそ、物質的幸福を傷つけられた貴子はあれほどまでに復讐心に燃えたのであろう。その事実、貴子は一層の自己嫌惡に陥つた。そうしてこの自責の念は長い間貴子を苦しめた。

自分を責める貴子を氣遣って、智彦は始終貴子に優しく接した。

「お前は何も悪くない。お前は正しいことをしたんだ。辛いのは分かるが、自分を責めたりしないでくれ」

だが、そうした智彦の言葉は貴子の頭上を掠めるだけであつた。自分を責めるという行為を止めてしまつたら、自分の精神は崩壊してしまつだろう。と貴子は思うのである。自分を責めるという自傷行為。とにかく貴子は自分を責めることによって何とか心の均衡を保つていた。恐らく、人間の自責の念とは自分を責める事自体が目的ではないのであろう。自責の念に駆られた自分を演じることで自分を慰め、納得させることこそ目的である。いわば一種の自己欺瞞である。そのようにして自分を傷つけ、一時の精神的充足を得ようとする意味で、自責という行為は貴子の体を引つ掻く、熱湯を浴びるといった自傷行為となんら変わらない。つまり貴子は自責の念を以て精神的幸福を全身全霊でかき集めていたのである。

もともと、貴子の自傷行為はこれだけに止まらなかつた。貴子が仕事に復帰して一カ月程経つたある日の夜である。診察を終え自宅に戻ると、何かを決心したような表情で、貴子は智彦の部屋へ向かつた。

「私たち、別れましょう」

智彦は面食らつて、唐突なその提案を鼻で一笑した。

「何言つてんだ。本気なのか？」

貴子はつられて笑ふ事もせず、表情は微動だにしない。

「ええ、本気よ」

「ちよつと待て。成り行きがまるで分からん。どういつ事なのかちやんと説明してくれ」

「この家に私は必要ないわ。私も一人になりたいの。ただそれだけ貴子はそう言つたが、本音のところは貴子にこそこの家が必要ないという事であつた。貴子には淳一のいなくなつたこの家にいる意味はなかつたし、何より精神的に不幸である状態のまま仕事だけが順調である事が許せなかつた。その不安定さに耐えられなくなつたの

である。そしてその証拠に、貴子の肌は徐々に疼き始めていた。が、智彦にそれが分かるうはずもない。

「さっぱり分かん。お前がそう考える理由は何だ？ 淳一を亡くして自暴自棄になっていているんだろう？ お前らしくもない。少し頭を冷やせ」

智彦はうつろたえているのか、いつになく早口である。

「私にはもう何を求めて生きればいいのか分からないのよ。だから一人になって考え直したいの」

無論、貴子はそれ程に生きる意味を見失っている。このまま同じ生活を続けていても、それが見つけ出せるとは思えなかったのである。だがその奥にある真意、すなわち物質と精神の安定という真意はやはり智彦には伝わらない。

「ほら見る。自暴自棄になっているだけじゃないか。お前は少し休んだほうがいい」

「そんなんじゃないわ。ただこのままじゃいけないと思うのよ。このままじゃお互いが不幸になる」

「不幸になるのは別れたって同じだ。淳一を亡くした不幸は俺たちが一生背負っていかねばならないんだぞ」

「そうよ。だからこそ私は幸福を探さなければいけないわ。物質的幸福と同時に、精神的幸福をね」

一瞬、智彦は何を言われたか分からなくなったのか、怪訝な表情で貴子を睨んだ。

「精神的幸福を探す？ じゃあ俺という事は物質的幸福なのか？」

貴子は一瞬俯いた後、再び智彦を見据えてこう言い放った。

「どうやらそうだったみたい。あなたといっても、私には満たされない何かがあるのよ」

貴子もさすがに「淳一も物質的幸福であつた」などとは言いだせなかったが、それでも智彦を失望させるのには充分だった。智彦は掌で額を覆い、力を失った様に溜め息をつきながら言った。

「それでも俺には分からないよ。俺に何か足りないものがあつたと

してもだ。精神的幸福などというものはそれほど大それたものなのか？そんなものは日常を生きているうちにふと気が付くと感じているものではないのか？」

「そうとも限らないわ。私にとっては物質的幸福よりもむしろ精神的幸福を得る事の方が難しく感じる。今になってその事にやっと気が付いたのよ」

「そうか。物質的幸福を投げ打ってまでそれを求めるんなら、それはよほど価値のあるものなんだろう。お前がそこまで言うなら俺に止められはしないさ」

智彦はうなだれながら、諦めた様な微笑でそう言った。息子を失い、妻をも失おうとしている智彦。そんな智彦の内心を察すると、さすがに貴子も胸が痛む。

「本当にごめんなさい。私の勝手であなを不幸に陥れてしまった。私って本当に自分の事しか考えられない人間ね。最低だわ」

だがそう言うのはやはり貴子の自傷癖であろう。そしてこの言葉を以て、貴子の自傷行為がまた一つ完成した。離婚という悲劇も、貴子にとっては幸福を求めるためのプロセスでしかなかった。「毒を食らわば皿まで」という言葉が貴子の脳裏を過った。

第五章

それから様々な法的手続きを経て二人の離婚は成立し、貴子は智彦の家を出た。元々この離婚は貴子が言いだしたものであったから慰謝料の授受はなかったが、貴子は智彦から当分の生活費を受け取っていた。都内に一人暮らし用のアパートを借りており、引越しも済んでいた。貴子は家を出てそこに向かった。家を出てすぐに、貴子が庭でオレンジ色の実をつけた蜜柑の木を見つめっていると、甘い風の香りが家族との思い出を連れて貴子を包んだ。家の者から疎まれはしたが、夫は優しくかったし、子供は利口で、いつも自分を慕ってくれた。無機質な自分の性格は変わらなかったが、それでもそんな自分なりに家族というものを育み、それに幸せを感じる事もあった。「愛情」という得体の知れぬものが、確かにそこにはあったのだ。そういう家族の思い出が詰まったこの家は、貴子にとって大切な場所に違いなかった。

（もう来る事もないわね…）

そう思うとすっかり涙が出そうになり、寒空の下コートの裾を翻し、貴子は足早に歩き出した。

新居のアパートは洋風な造りの九畳一間であり、一人暮らしの女性でも安心して住める、セキュリティの整ったところであった。隣近所に挨拶をして回った後、貴子は伽藍とした部屋に籠り、一人静かに自分の行く末を考えていた。息子を亡くし、夫と離婚した三十二歳、無職の女の一人暮らし。どう考えても哀れな姿である。が、肌だけが絹の様な滑らかさを不気味に晒している。

貴子はふと、自分の母親の事を思い出した。あれは貴子が中学生の頃の事である。貴子の母親は自分を捨てて見知らぬ男と共に姿をくらましたのである。父親が早世したため、それまで貴子は母子家庭で育った。母親は貴子を女手一つで懸命に教育してきた。また母親は熱心な医学者でもあったので、多忙で夜遅くなる事も度々あつ

たが、それでも貴子になるべく不憫にさせないよう、出来るだけ多く貴子に接し、貴子がやりたいと言った事は何でもさせ、食事も殆ど自分で作っていた。当時から賢い子供だった貴子はそんな母親に心配をかけまいと、日々「良い子」を演じ、学校でも常に優等生であった。だが貴子が中学生になると、母親の様子が一変した。四六時中溜め息ばかりつき、元気がないのである。心配した貴子はなるべく母親に負担をかけないよう、家事は殆ど自分でこなし、母親の体調を気遣った。貴子が依頼心のない自立した女性であるのはこういう経緯によるものである。しかしその努力も虚しく、母親は日に日に衰弱していく様に見えた。遂に見かねた貴子は母親に精神科の診察を受ける事を勧めた。が、母親はそれを拒んだ。そしてふと溜め息をつき、こんな台詞を漏らした。

「しかし、女の幸せって何なのかしらね…」

貴子にはその時、その意味するところが今一つ分からなかった。父親はいないにせよ、母親は優秀な医学者としてキャリアを積んでいたし、貴子も少なくとも客観的には順風満帆の学校生活を送っていた。そんな自分たちに、何か不安でもあるのだろうか、と疑問に思っていたのである。そして貴子の疑問が解かれぬまま、母親は遂に家を出た。ある日忽然と姿を消したのである。貴子は特に寂しいとも感じなかったが、さすがに中学生一人では暮らしていく事が出来ず、後日親戚に引き取られ、そこで暮らした。母親と離れて暮らす事になった貴子を不憫に思い、親戚は貴子に惜しみない愛情を注ぎ、貴子に何一つ不自由をさせなかった。貴子がその親戚から母親の話を聞いたのは、それからずっと後の事である。

「お母さんね、仕事も辞めて男の人の所に行ったんよ…」

貴子はそれを聞いた時、一層不可解であった。娘を捨て、仕事を捨て、向かった男に一体どんな希望を託していたのだらうと。そしてその疑問はついに解決されないまま今に至るのである。

貴子は部屋で一人、母親の言葉を反芻していた。

「女の幸せって何なのかしらね…」

貴子は今、母親の気持ちが僅かながら分かる様な気がした。母親は、物質的幸福を捨てて、精神的幸福を求めたのではないか。勿論、母親がその後幸せになれたのかどうか貴子は知らない。それどころか夫や子供まで物質的幸福と見なした自分を鑑みると、その可能性は極めて薄いのではないかとすら思われる。ただ、何か一縷の望みを見出して新たな人生を選んだ母親の姿が、今の自分と重なって見えるのである。

貴子は、自分の手の甲を撫でながら感じていた。自分の痒みの正体とは、つまるところ「女」という性質ではないかと。だとすれば、何と厄介な性質であろう。所謂勝ち負けという男の幸福観の様に客観性がなく、誰にも答えを求められない精神的幸福などというものを追いかけて一生を過ごさねばならない。何物かも分からぬものを諦められずに生きる者の行く末など、不幸に決まっている。人間は幸福が諦められないから不幸になるのではないか。であれば女は結局不幸なのではないか。それを貴子が肌で感じていた時には、外は既に闇夜であった。暗い部屋で一人、貴子は孤独を感じた。

第六章

それから暫く、貴子は気ままに過ごしていた。貴子は幼少の頃から一人でいる事には慣れていたが、何せ初めての一人暮らしである。貴子は大学生になったときの様に気分が高揚していた。早起きしてジョギングし、自分の為だけに料理を作り、風呂を沸かして入る。こんな当たり前の事が、貴子には生まれ変わったかの様な新鮮さであった。この歳なつて青春を取り戻した様な瑞々しさを味わう事になろうとは、貴子は全く予想していなかった。とは言え、いつまでもこうして貯蓄を切り崩す生活を続けている訳にもいかない。生活の糧を得る為に仕事をしなければならぬ。いや、それ以前に気ままな生活を存分に満喫していると、次第に仕事がしたくなるのである。貴子は自発的に仕事をしなくなつた事などこれが初めてであった。これまでの貴子にとって、仕事など金銭を得る為の手段であり、社会的ステイタスを示す為のバッジでしかなかった。つまりは仕事とは勝ち取るものであつて、選ぶものではなかつたのである。が、貴子はここに来て初めて「自分は何をすべきか」という難問に挑む事となつた。貴子には高い専門性がある。智彦の家の病院でも皮膚科を担当していたから、その経験を活かさない手はない。だが今更勤務医としてどこかの皮膚科に潜り込むのも面白くない。かいつて開業医として皮膚科を開業したところで、何の伝手も資金力もない貴子がビジネス上の成功を収める事は難しく思われた。自分の専門性を活かし、かつ経済的成功をもたらし、更に精神的幸福を得られる仕事となると、専門知識と経験のある貴子も意外と道に迷うものであつた。

（こんな迷いを抱いたのは初めてだわ）

恐らくは、偏差値教育の弊害であろう。それまでの貴子にとっては登り詰める事が全てであり、自分が何をしたいのか、何になりたいのか、何に向いているのかといった迷いを持つ事はなかつた。今更

ながらこうした青春の迷いにぶち当たり、貴子は自分が如何に世間知らずであつたかを思い知つたのである。

ある日、貴子は散歩がてら近所の喫茶店に入った。主婦と見られる二人組が先客として既におり、その隣に貴子が座つた。彼女達以外に客はいなかった。店内に洒落たジャズが流れている割には安っぽい内装の店である。貴子がぼんやりと本を読みながらコーヒーを啜っていると、隣の主婦達の会話が自然に耳に入つて来た。それは大方下世話な内容であつたが、声が大きいためにどうしても貴子の意識はそちらに傾いてしまう。

「渡辺さんのとこの息子さん、大学に受かつたらしいわよ」

「へえ、山下さんのお坊ちゃんなんて大変なのにな。高校生で彼女が妊娠しちゃつて、しょうがなく高校中退して働いてんのよ」

「大変と言えば、松尾さんの旦那さん、リストラされたんですって。平日の真つ昼間に家の周り歩いてるの見たから、多分本当よ」

「大変ね。あの歳じゃ再就職も厳しいわね」

「そりゃ新卒ですら採用が絞られてるんだもの。不景気だわねえ。」

そう言えば聞いた？小嶋さんとの娘さん夫婦、離婚したらしいわよ」

「え？結婚してまだ一年しか経つてないじゃない？」

「そうよ。何でも旦那さんの浮気が原因らしいんだけど……」

延々と続く主婦達の会話を、貴子は本に視線を落としたまま盗み聞きしていた。何を下世話な、などと貴子は思わない。物質的幸福とは必ず他人との比較によつて成り立つ訳だから、それを求める者にとって他人の事情が気になるのは当然である。つまり彼女達は物質的幸福を求める者としてあるべき姿なのだ。それはそれで構わない、と貴子は思う。だがその内にそれに満足できない時が必ず来る。女なら尚更のことだ。その時に彼女達がどのような旅路を志すのか、貴子はそこに興味があつた。広大な砂漠を方向も分からず歩く様な旅路。女の宿命。既にその旅路を歩み始めていた貴子は、故郷を思い出す様な懐かしさで主婦達の会話を聞いていたのである。

喫茶店を出ると、貴子は路傍に立ち、向かい風を受けて髪を靡かせた。新しい風が吹くのを肌で感じていた。

第七章

貴子は毎日の様に街に繰り出した。何か自分の行く末についてヒントになる様なものがないか、見て歩きたかったのである。その日の貴子はＴシャツの上に革のジャケットを羽織り、ジーパンの上から黒のロングブーツを履いたカジュアルな出で立ちであった。貴子がそのような服装で歩いたのは実に久しぶりである。智彦と結婚している間、とりわけ淳一がいる間は、貴子は近所の主婦達に合わせ、て派手なブランド物の衣服で身を固めていたし、化粧も濃かった。周りの主婦達は皆競い合う様にして同じ様な艶やかさであったから、主婦同士で井戸端会議などしていると、むせ返る様な香水の香りと相俟ってそこだけファッションショーの様に華美な様相を帯びた。だが今や貴子はそのような空気に縛られていない。軽装で歩く自分の姿がショーウィンドウに映るのを見て、貴子は自分が少しだけ若返った様な気がしていた。若返ったのは何も外見だけではない。多くの若者で賑わう都会の喧噪の中を歩くと、気分まで若返ってくる。貴子は大学生の時でさえ、街に出て遊び歩く様な事はなかった。友人がいない訳ではなかったが、そのような目的のない行為が無意味に思えてならなかったのである。そういう貴子にとって、雑踏にまぎれてあてもなく街を放浪する事は刺激的なほどに新鮮であった。そうして夕暮れになると、急に肌寒くなってきた。貴子が肩をすぼめて歩き、そろそろ帰ろうかと思案していると、ふと目の前にバーの小さな看板が現れた。銀色のスチールの看板に黒い文字で「solace」と書いてある。このビルの八階にあるらしい。貴子は何故か吸い寄せられる様にエレベーターに乗った。貴子に飲酒の習慣はなかった。せいぜい智彦と出会ったばかりの頃、何回か一緒に飲みに行った程度である。結婚してからは殆ど飲んでいない。一人でバーに入った事など勿論ない。だがこの時は何かを変えたかった。自分の中で怜悧に淀んだ血液とでも言うべき物を逆流させてみたい

気分であつた。今の自分には知性も計算高さも要らない。必要なのは出会いだ。貴子にはそう思われた。

小さなエレベーターが八階に着くと、そこは薄暗い木製の内装に橙色の間接照明が点々と揺らめく空間であつた。貴子は恐る恐る店内に入り、ゆつくりと前へ進んでいった。店の中央に水槽があり、青白い光の中でアロワナが優雅に身を翻している。と、店の奥のカウンター越しにバーテンダーがにこやかに笑いかけている。

「いらつしゃいませ」

バーテンダーは柔らかくお辞儀をした。

「あ、一人です」

近くにいた店員に、おずおずと貴子は言った。

「お一人様ですね。ではこちらのお席にどうぞ」

と言つて店員が勧めてくれたカウンターの席に、貴子は腰を下ろした。椅子に張られたベルベットの質感が心地よい。

「お飲物は？」

と、髪をオールバックにし、黒のベストに身を包んだバーテンダーがおしぼりを差し出しながら尋ねてきた。貴子は酒にはあまり詳しくなかつたので、とりあえず

「ドンペリのロゼを」

と言つた。ドンペリなどホストクラブのイメージが付きまといたが、それ以外に思いつかなかつたのである。貴子はおしぼりを受け取ると、そのひんやりとした感触に自分の体が火照っている事に気が付いた。柄にもなく緊張しているようであつた。

その後差し出されたグラスを傾け、貴子はピンク色のスパークリングワインを飲んだ。それは喉元をゆつくり通り過ぎると、五臓六腑をほのかな温かさで満たした。

（美味しい……）

その時、貴子は酒を嗜む者の気持ちが何となくわかつた様な気がした。単に舌で感じる味ではない。それは心に沁みわたる様な、精神で感じる味であつた。それまで貴子は何度か酒を飲んだ事があつた

が、そんな味覚に気付いたのはこれが初めてであった。貴子はグラスを傾けながら、しばしばその中のピンクゴールドに輝く液体を、グラスの底から立ち上る気泡の筋を見つめ、恍惚に浸った。時折智彦や淳一の姿がグラスに映る。自分がこうして一人酒を飲みに来ている事を彼らが知ったら、どう思うだろうか。どんな顔をするだろうか。きつと呆れ果てるに違いない。そんな物煩いをかき消す様に、貴子はまたグラスを傾ける。

そして気が付くと、貴子は飲み過ぎていた。久しぶりに酒を飲んだからであろう。様子は普段と全く変わらないものの、顔が赤く火照っている。貴子はその事に酒瓶の並ぶ棚の奥に貼られた鏡を見て気が付いた。

（馬鹿ね、もう帰らなくちゃ）

貴子がそう考え横を向くと、いつの間にか隣に若い男が座っている。スーツを着ているが、ネクタイは外している。大してハンサムという訳でもないが、まだ二十代だろうか、貴子よりは若そうである。視線を元に戻し、貴子は飲み残しを飲んでみると、思いもよらずその男から声をかけられた。

「お姉さん、一人？」

貴子は一瞬どきりとした。男に声をかけられた事など全くない。自分ナンパされているのだろうか。いや、こんな三十を超えた女をナンパする男がどこにいるだろう。貴子は我に返った。

（何を馴れ馴れしい）

貴子は男の声を無視し、黙って飲み続けた。

「あれ」

男はそう言うつと首を傾げ、正面を向いてバーテンダーに注文をした。

「ゴッドフィンガーを一つ」

脚を組んで人差し指を立て、何やら気取っている。が、

「ゴッドファーザーでしょ」

とバーテンダーに窘められた。

「ああ、そうだ、それを一つ」

男は照れ笑いをしている。貴子は自分の失敗を笑い飛ばしてしまう男の様子に、可愛らしさと言うか人間の大きさと言うか、そんな魅力を感じた。貴子は思わず、

「ふふ」

と声を出して笑ってしまった。すると男が再びこちらに視線を向ける。

（いけない）

貴子は慌てて立ち上がると、勘定を済ませ、店を出た。外へ出ると、寒さに身が縮んだ。しかし酒のせいかな顔の火照りがなかなか治まらず、貴子は家に着くまで顔を手で扇ぎながら、早足で歩いた。

第八章

どこで近況を知ったのか、大学時代の友人から連絡が来たのはそれから二、三日経ってからの事である。珍しく貴子の携帯電話が鳴った。

「貴子、あんた旦那さんと別れたんだって？今どうしてるの？」

またおせっかいな奴が出て来たな、と貴子は内心辟易していたが、心配する友人を邪険に扱う訳にもいかない。

「そうよ。今は一人で暮らしてるわよ。私なら大丈夫だから、心配しないで」

貴子は素っ気なくそう言ったが、

「心配するわよ。あんた仕事は何してるの？」

と友人が畳み掛ける様に聞いてきたので、貴子は

「今探してるところ。自由気儘なフリーターよ」

と自嘲気味に答えた。すると

「ちょうど良かった。ねえ、今日暇？時間があれば今夜会わない？」

と友人は言った。突然の提案に貴子は困惑した。

「いいけど、何するの？」

目的もなく外出するのは、やはり貴子の中では不自然であった。

「何するって、食事に決まってるでしょ。まあ色々と話もあるし」

と友人が意味深な言い方をするので、貴子は

「話って何よ？ここでは言えないの？」

と続けざまに質問した。友人は半ば呆れて、

「もう、あんたほんとに変わってないわね。直接会って話したいの。じゃあ決まりね」

と言うと、場所と時間を指定し、電話を切った。すぐに詳細のメールが貴子の携帯電話に送られてきた。

「じゃあ今夜七時にこの場所で。ヨロシク」

と、何故かハートの絵文字を付けて送られて来た。貴子は

「了解」

と無機質に返した。

その日の夜七時、貴子が指定された場所に向かうと、既に友人が来ており、笑顔で手を振ってくる。

「久しぶり」。あんまり変わってないね。」

「理恵も、変わってないわね」

この理恵という友人は貴子の大学時代の友人で、共に皮膚科の専門であった。大学時代の成績は貴子と違って良くなかったが、それでも何とか大学を卒業し、医師国家試験に合格した。その後東大医学部付属病院で実績を積み、今では独立して私立病院を経営しているらしい。貴子はその病院に行った事こそなかったが、なかなかの盛況ぶり、最近になって病院を移転させ、持ちビルを構えたという事を噂では聞いていた。もっとも貴子にも詳しい事は分らない。理恵が独立したという話を聞いてから、実際に理恵と会うのはこれが初めてである。

二人は近くの韓国料理屋に入った。そこで食事をしつつ思い出話に花を咲かせた。理恵はマツコリという酒が口に合わないらしく、一口飲んだなりビールに鞍替えしてしまった。

「そうそう、仕事探してるんだって？ どんどこ探してるのよ？」
チヂミをつまみながら、理恵が思い出した様に言う。

「具体的にはまだ決まってるわいよ。まだ動き出したばかりだもの。まあ自分の知識とか経験が活かせて、なおかつやりがいの見出せる仕事が良いと思うんだけどね」

と貴子が言うと、理恵は箸の先端を貴子に突きつける様にしてこう言い放った。

「何就活中の学生みたいな事言ってるの。そんな曖昧な基準じゃいつまで経っても見つかりやしないわよ」

「しょうがないじゃない。私就職活動なんてした事ないもの。これの良い機会だと思って、自分を見つめ直してるわ」

貴子は遠い目をしながらそう言った。

「そうは言ってもねえ。もう歳も歳じゃない。いくら知識や経験があっても、このままだと道は狭くなるばかりよ」

網で焼いているカルビを返しながら話す理恵の何気ない一言が、貴子の心に突き刺さる。

「そんなにはつきり言われなくても、分かてるわよ。それに歳はお互い様じゃない」

貴子は少しむっとして答えた。そんな貴子を理恵はおかしがった。

「ふふ。そんな貴子ちゃんに提案なんだけどさ。うちのクリニックに來ない？」

この提案は貴子にとって思ってもない話だった。無論勤務医になるという選択肢は最初から貴子の中で除外されていたから、それを理恵から誘われる事になるうとは期待もしていなかったのであろう。

「悪いけど、私は勤務医になる気はないわよ」

と貴子は理恵の提案を一蹴した。が、理恵の説得は続いた。

「まあまあ、ずっと勤務医を続ける事になるとは限らないよ」

理恵の話によればこうである。理恵の経営するクリニックは勿論皮膚科であったが、その中でも美容に特化した主に女性がターゲットの皮膚科であった。アンチエイジングなどの気運が高まり、昨今急速に市場が拡大しているという。市場が成長期にあるとは言え、まだまだ飽和状態というほどには成熟しきっておらず、新規参入の余地は充分にある。市場がなかなか成熟しきらない要因は、その参入障壁にある。その市場に参入するには、医師免許を取得していなければならぬのは勿論の事、皮膚科の専門医である事、更に美容にまつわる研究、テクノロジーについて一通りの見識を持っている事が最低条件となる。加えて主たるターゲットが女性であるから、医師が女性である事が望ましく、それも若ければ若いほど有利であると言う。普通医者という職業はいかにも経験のありそうな年配の医者の方が信頼されるものであるが、こと美容という分野においては見た目の若い医者の方が助言も説得力を増すのであろう。皮膚科について大方の知識、経験があり、かつ若い女性の医師と言えば、貴

子にはもはや合致しない条件などない訳である。

「だけどね、いきなり独立開業しようと言っても、ノウハウがない訳でしょ。だから少しの間うちに来て色々勉強してから独立するのがいいと思ったわけ」

理恵の滔々とした説得は非の打ち所のない様に、貴子には思えた。

確かに美容皮膚科の分野は近年になって大分脚光を浴びて来ており、切ったり貼ったりする美容外科の安全性を懸念する女性からはかなりの支持を得ているらしい。まだ新しい市場である分潜在的な顧客はそこら中に眠っているというふうなものであるし、しかもある程度先駆者がいてくれるお陰で後発の優位性を保ちつつ経営に乗り出せそうである。だがそう易々と誘いに乗る貴子ではない。

「どうして私を誘おうと思ったの？私が独立開業してしまえば、あなたの商売敵になるのよ？」

確かに、理恵が単なる友情の為に貴子に救いの手を差し伸べたという事もあるう。あるいは一定期間有能な助手を雇えるという利点もあったかも知れない。しかしそれだけでは動機として幾分弱い様な気がしてならなかったのである。

「それはね」

理恵はグラスに残ったビールを飲み干すと、溜め息混じりに行った。「独立開業したとは言っても、一匹狼ではられないのよ。この世界でも横の繋がりが大事なの。医師会だとか研究会だとかまあ色々あるけど、孤立を避けるために医者同士も連帯するのが普通なのよ。その方が最新の情報なんかも入り易いしね。ところがこの市場ってまだ発展途上なもんだから、横の繋がりが薄くてね。孤立無援の不安な経営を強いられる訳よ。それについては私も例外じゃなくて、一刻も早くこの孤軍奮闘状態から抜け出したい訳」

要するに、貴子をこの市場に引き入れる事で、ノウハウを共有するなどあらゆる面で協力して経営していく事が出来れば、理恵にとっても心強いという訳である。貴子はそれに一応は納得したが、それでもすぐさま理恵の提案を承諾することは出来なかった。

「大事な話だから、少し考える時間をちょうだい」
と言ってその場を終えた。だがこの時貴子の心は既に九割程度まで
答えを出していた。「考える」などというのはある程度時間を置いて
みて心変わりしない事を確かめる為の口実に過ぎなかった。何し
る自分のこれまでのキャリアが活かせ、なおかつ成功すればある程
度の経済的成功も得られる事が期待できるのである。もっともそれ
で肝心の精神的幸福が得られるかどうかについてはよく分からなか
った。残りの一割とはそれである。しかしそんなものはやってみな
ければ分からないし、悩んでいても答えなど出そうにない事がここ
最近の貴子の「自分探し」によつてはつきりしていた為、貴子がこ
こで一步を踏み出そうという決心を固める事はそう難しい事ではな
かったのである。

第九章

そうして貴子は理恵の経営するクリニックに勤務する事となった。理恵の助手として働く傍ら、貴子はここで多くの専門的知識を吸収した。貴子には元々医学的素養はあった為、それを裏付けに多くの知識を短時間で習得する事が出来た。例えばピーリングやレーザー治療、ヒアルロン酸注射などの皮膚科学的方法論から、サプリメントによる療法といった栄養学的な療法まで、その知識は多岐に渡った。他にも化粧品を選定方法やエステティック療法などの応用的な分野にまでその手を広げていたから、貴子が学んだ知識は膨大な量であった事が想像に難くない。だが目標の定まった時点で、貴子はその目標達成能力を遺憾なく発揮させた。恐らくこの能力を持たぬ者が例え貴子と同じだけの医学的素養を以て同じ事をさせても、貴子の倍は時間がかかったであろう。それ程に貴子の目標達成にかかる執念は凄まじいものであった。

そうして貴子がクリニックで働き始めてから三年の月日が流れた。その頃には既に貴子は診療時間を理恵と二分するまでになっており、専門知識でいえばむしろ貴子の方に分があつた。また貴子には得意客もついており、彼らは貴子の適確なアドバイスを信用し、中には遠方から遙々来る者もあつた。恐らくそのまま開業したとしても彼らが付いてくる事は目に見えていたから、今すぐにでも暖簾分けという形で独立開業する事も充分に可能である様に思われた。が、貴子はそれを実行する事を躊躇った。自分に専門知識があつたとしても、所謂ビジネスセンスというものがあるのかどうか多少不安だつたからである。貴子は経営についてはおおよそ無知であつた。経営コンサルタント等をブレーンとして雇えば何とかなる気もしたが、そういった人種が果たして信用に足るものかどうか今ひとつ確証がなかったのである。そのため心中迷いを抱きながらも貴子は暫く勤務医の地位に安住した。

貴子は休日、久しぶりに街へ出て、「solace」という以前入ったバーに足を運んだ。何か特別意図があった訳でもないが、迷うと酒が飲みたくなる体質なのかも知れない。貴子がこのバーに来るのは実に三年ぶりだが、とは言え一度訪れた店に入る事は初回よりも格段に容易かった。貴子はカウンターの席に座ると、三年前と同様、ドンペリの口ゼを頼み、鼻で香りを感じる様にして味わった。しかしどうだろう、その味は三年前程の新鮮味がなく、大した深みも感じなかった。貴子にはそれが何故なのかぼんやりと見えていた。それは酒を味わうのには、心の敏感さが必要であるという事である。以前ここで酒を飲んだ時、貴子の心には大きな傷があった。無論息子を失い、夫と別れた時の傷である。この心の傷に沁みる感覚が過去に貴子を感じた酒の味であつたらう。勿論その傷が今でも癒えようはずはない。だが仕事において順調であつた事がその傷の存在を幾分か貴子の記憶から遠ざけていたのである。のみならずその傷を覆い隠し、心の感性を鈍らせていた。鈍った心に酒が沁みる事はない。故にこの時貴子は酒を心で味わうという言葉は自傷行為に酔う事が出来なかったのである。これほど分析的ではないにせよ、貴子は感覚的にその事を悟っていた。

ともかく三年前とは比べようもないほどに酒の味はつまらないものになっていたが、この日は貴子にとってそうつまらない事ばかりでもなかった。ふとカウンターの奥を見ると、一人で飲んでいる男が目についた。最初は薄暗くて分からなかったが、貴子に少し酔いが回って来た頃、それが三年前ここで貴子に声をかけてきた男である事に気が付いた。以前貴子はこの男を無視したが、顔だけははっきりと覚えていた。男性からあの様な声のかけられ方をされたのは初めてであつたから、とりわけ印象深かつたのであろう。と言つても貴子には何もなす術がなかったし、特に声をかけたいという意欲もなかった。その男の存在に気付きながらも、黙って酒を飲んでいたのである。ところがバーテンダーが近づいて来て、貴子の目の前に透明なカクテルを置き、こう言つた。

「あちらのお客様からです」

貴子が驚いてカウンターの奥を見ると、例の男がこちらに向かって微笑んでいる。貴子は正直ぞっとした。これほどまでに古典的な手口を用いて声をかけるなど、今時下手なラブコメディでも聞いた事がない。その証拠に、バーテンダーは慣れない役を果たしたぎこちなさで何やら落ち着かない様子でグラスを拭いている。しかしその手段の稚拙さが僅かばかり貴子を安心させたのもまた事実である。

「やあ、お姉さん一人？」

その軽率な声はやはり三年前と変わりがなかった。しかし貴子は三年前と違う。

「見れば分かるでしょ」

この時の貴子には以前の様な警戒心がなかった。人を受け入れるだけの心の余裕があったとも言える。そうでなければ、以前にも増して強い勢いで椅子を蹴って店を出ていたであろう。しかし逆に言えば一瞬の判断でそうしなかったばかりに男を受け入れざるを得なかったとも解釈できる。

「隣に座っても良い？」

と接してくる男に対し、貴子は

「どうぞ」

と、素っ気ないながらも言うしかない。貴子の隣に座り、男はこう言った。

「この店にはよく来るの？」

その時貴子は気付いた。この男は自分の事を覚えていない。貴子は急に恥ずかしくなった。自分ばかりがこの男を一方的に覚えていたのである。この男が三年間自分を待ち続けていたのではないか、等と一瞬でも想像した自分が恥ずかしかった。

「いいえ、三年ぶりよ」

と貴子が言っても、男は貴子を思い出さなかった様子であった。もつともそれが故に、貴子はその男に対して饒舌になった。自分の素性を知らない人間に、普段とは全く違った自分を演じてみたかった

のである。恐らく酒の勢いもあつた事であらう。男もそんな貴子の多弁に合わせて、相槌を打っていた。話の内容はわざわざここに内容を語るまでもない。単なる世間話である。重要なのは貴子の気持ちの昂りである。普段固く閉ざされた表情には満面の笑みがこぼれ、低く尖つていたはずの声は高く転調し、軽率な響きを得るほどであった。何も知らない人間がこの二人を見たら間違ひなくカップルだとして疑わないであらうし、その場合女の方は特別甘えん坊な性格と判断したに違ひない。

そうして二人の關係が温まつて来た頃、男はタバコに火を付けると、不意にこんな事を言いだした。

「俺さ、ここだけの話、会社を辞めようと思つてゐるんだ」

貴子は

「あら、そうなの？どうして？」

と言うと、男から勧められたタバコを一本引き抜き、吸えもしないタバコをふかした。

「分からない。今の仕事に特別不満があるって訳じゃないし、転職のあてがある訳でもない。ただこのまま人生を無難に終えていくのだと思うと、何だか寂しくてね。勿論今だつて悪くはないよ。普通に働いて、たまにこうして酒を飲みにくるのも一つの幸せの形だ。だがそれを突き破つた先に真の幸せがある様な気がしてさ」

男がタバコの煙を吐き出しながら言うと、貴子はいかにも年上の女らしく現実味を帯びた物言いをした。

「そう、でもやりたい事もないのに会社を飛び出すなんてあまりにも無鉄砲じゃないかしら。それって君が考えてるよりもずっとリスクーな事よ。よく考えてからにしたらどう？」

と言ひながら、貴子は内心男の気持ち痛みほどよく分かつた。過去に一人で生きていく事を決心したときの自分と重なつて見えたのである。

「それは百も承知さ。でも今しかないと思つんだ。やるなら今しかねえゝって言う歌あつたら？長渕剛だっけ？そんな感じだよ」

貴子はその気持ちだけは充分に分かった。だがそれでも男の意向に賛同する気にはなれなかった。男には守るべき何かがある。それは時に人生を謳歌する事よりも優先されるべきものである。

「その歌は知らないけど、何をやるかによっていつやるかは異なるわ。それに今という時間の定義は曖昧で、よく考えた末に今と言ってもいいわけでしょ」

貴子は男の冗談を聞き流しもせず反論した。が、すぐにこう付け加えた。

「ごめんね。説教臭くなつて。でもあなたに後悔してほしくないのよ。夢を見るなんて言わないわ。若気の至りだなんて言うつもりもない。ただ、今の君は自分で思うよりも立派よ。男が地に足をつけて自力で生きている姿は女から見れば立派なものだわ。それは女のようにふわふわしたものを追いかけていないもの」

男はその意味するところが分かったのか、僅かに呪縛から説かれた様な、安堵した表情になった。この男は心の深層で、会社を辞めたいではなく、辞めようとしている自分を止めてほしかったのかも知れない。

「そうか、そんなもんか」

そう言つてタバコを灰皿にねじ伏せる男の所作が軽かった。同時に、貴子にもある勇気が湧いてきた。それは男というものが如何に精神的幸福を求める事に適さないかを目の当たりにした結果である。男に自傷行為は似合わない。精神的幸福を追求する事は女の特権と言つても良いかも知れない、と思われた。霞を追いかける様な女の不幸の中に貴子が一筋の希望を見出したのはこの時であつた。

（私は納得のいく様にやらなくちゃ）

こうして、最後まで名を聞く事も出来なかつた男をきつかけにして、貴子は独立開業を決めたのである。男は貴子との別れ際、

「今日はありがとう」

と改めて礼を言つた。

「こちらこそ」

と貴子も返した。その男がその後どうなったかは、貴子には知る由もない。

第十章

最終出勤の日、貴子は白衣に身を通しながら感慨に耽っていた。
(三年間なんてあつという間ね)

働き始めたばかりの頃は広く見えた院内も、今はごく手狭に感ぜられた。貴子はこの日を最後にこのクリニックを退職し、代官山に構えた自身の店舗で開業する事になっていた。開業資金は銀行から借り入れた。貴子のキャリアと事業計画を以てすれば、融資担当者による審査を通過する事はそう難しい事ではなかった。加えて経営に関する事は理恵から助言を受ける事にしていた。クリニックを成功させているところを見ても、どうやらこの分野に関して言えば理恵に一日の長がある事は貴子の目にも明らかであった。

この日の診療を終えると、スタッフの一人が貴子のもとに駆け寄って来た。

「貴子先生、お疲れ様でした。今夜は先生の壮行会をやりますので、よろしく願います」

「ああ、そうだったわね。こっちこそよろしくね」

その日の壮行会は、近くにある日本料理屋で催されるらしかった。理恵とスタッフ五、六名が参加予定であった。ちなみにこのクリニックのスタッフは全員女性で、貴子よりも歳の若い者ばかりである。貴子は自身のクリニックを設立するにあたって、この中のスタッフの一人を引き抜き、新しく雇ったスタッフの教育係に充てるということで理恵と話がついていた。つまり正確に言えば貴子とそのスタッフ一名の壮行会である。

宴会の席は、壮行会というのは名ばかりで、二ヶ月に一度ほどの周期で行うクリニックの飲み会と何ら変わらなかった。最後の挨拶は貴子が行う事になっているのだろうが、それすら毎度の事であり、特に目新しい事ではない。それぞれが近くに座った者と雑談に興じており、貴子も理恵と酒を酌み交わしながら話をしていた。

「貴子、お疲れ様。だけどこれから勝負ね」

理恵がその日初めて労いの言葉を口にした。

「そうね。でも私はまだクリニックの経営に関して分からない事ばかりだわ。不安六割、嬉しさ四割ってところかしらね」

「あはは、あんたでも弱気になる事があるのね。ま、経営の事なんて大して難しい事じゃないわよ。おおざっぱな数字を把握して、資金繰りさえ上手くやってれば、難しい事なんて専門家に任せておけば良いのよ」

「理恵はビジネスの才覚があるからね。いつその事留学してMBAでも取ってみたら？」

「ふふ、無理無理」

理恵は笑いながら、杯に口をつけた。そして貴子から目を逸らしたままこう付け加えた。

「でもね、一つ言えるとすれば、独自色を出していくことじゃないかな」

「独自色？」

「そう、美容皮膚科って今でこそ珍しいかも知れないけど、今後市場が飽和してくれば生き残りが難しくなってくるわ。そこでどれだけ自己の強みを持てるかっていう事よね。まあこれは貴子のところだけじゃなく、うちにも言える事だけど」

「自己の強みね…」

「何か思いつくものある？」

理恵は大した期待もせず聞いた。が、貴子は一つの出来事を思い出していた。

「大分前だけど、私の患者さんの中にね、若い女の人がいたのよ。彼女が言うには、お付き合いしている彼がいるんだけど、付き合ってた何年も経つし、そろそろ結婚の話を持ち出したいんだって言うのよ。でも今の自分には自信が持てなくて、切り出せそうにない。だから綺麗になりたいんだって。結局いろんな治療を施して、彼女は綺麗になったの。そうして後日フィアンセを連れて私を尋ねて来た

んだけど…」

「へえ、良い話じゃない」

「そう、良い話なんだけど、結局彼女にとって幸せだった事って、彼と婚約できた事ではなくて、自分に自信を持てた事だと思ふの。自信のないまま求婚して、例え運良く婚約できてたとしても、恐らく彼女の中で物足りない何かが残ってたと思ふ。要するに今の自分には魅力がないという事を自覚して、それを克服したところに価値があると思ふのよね」

「目に見える幸せより、心の幸せかあ…」

「そう。それは自分の不幸に真剣に向き合う事で得られるものだと思う。私はそういう人の手助けをしてあげたい」

貴子がそういうと、理恵は感心したように言った。

「それは立派な志ね。そういう志は貴子の強みだわ」

「強みっていう程じゃないけど、そういう患者さんの意志を分かっ
てあげられる医者になりたいわね」

「立派な強みよ。医者だって結局は客商売だもの。どんな技術よりも人間的魅力が最後にはものを言うわ」

いつにない真剣さで自分を励ます親友が、貴子には心強く思えてならなかった。

「理恵、ほんとに色々ありがとうね」

つい貴子は生真面目な台詞を口にしてしまった。

「馬鹿！これからじゃないの、私たち」

理恵がそう言うのと二人は弾ける様に笑い、時折目頭を拭った。

第十一章

その後貴子のクリニックはオープンした。理恵のクリニックの顧客全員にダイレクトメールで告知しておいたので、閑古鳥が鳴く様な事態にはならなかったが、それでも理恵のクリニックと比べると閑散とした印象が否めなかった。無論開業して間もない訳であるから、当然である。が、妙に時間を持て余している時には、貴子はふと不安を感じた。そんな時、決まって貴子は椅子に座ったまま足をぶらつかせ、ブラインド越しに窓の外をぼんやりと見つめている。表には相変わらず人気のない路地が伸びており、それを挟む様にして掘りの深い小川が穏やかに流れている。空気一つ動かぬ平和さである。それを見下ろす貴子にとって、

（大丈夫なのかしら）

などと他人事の様に構える自分だけが頼りであった。そうして時間を潰しながら、たまに患者が来れば診療を行い、ともかく貴子は徐々に要領を得ていった。診療には慣れているはずの貴子も、最初は何かが自分が潜りの医者になった様な心持ちでいた。そういうぎこちなさも数を重ねていくうちに洗い流されていったのである。貴子だけでなく、スタッフもそのようである。クリニック全体が日に日に本物らしくなってきた事に、貴子は充実感を得ていた。それぞれの業務が滞りなく行え、それが何の意識もしないまま自然に流れる様になると、不思議なものでそれについてくる様に顧客が増加した。

顧客にアンケートをとってみると、クリニックを知ったきっかけの中で一番多かったのが、「口コミ」であった。もともと物理的な口コミではなく、インターネット上の評判というのが大多数である。今やインターネットで良い評判も悪い評判も瞬く間に広がってしまう。そうして情報伝達の物理的阻害要因を排したところに、新規参入のチャンスがあった。つまりはより実力本位の勝負が可能な

訳である。これは貴子の計算のうちで、例えばホームページなどを念入りに作成することで、初見の顧客に安心感を与える事に成功していた。のみならず美容関係のサイトに寄稿する事で貴子自身の知名度を上げ、クリニックのブランドイメージを形成していた。こうして貴子は戦略的に見てまずまずの成果を収めたのである。肝心の診察の方であつたが、こちらも貴子の意思が反映されたきめ細かなシステムが用意されていた。クリニックは完全予約制で、患者を診察している時に他の患者が入れない様になっていたし、部屋の造りも患者同士が顔を合わせる事なく診察を終えられる様に設計されていた。患者のプライバシーを徹底して守つたのである。加えて初診では必ず「何故綺麗になりたいのか」という動機を聞ける範囲で聞いた。ともすると通院を中断しがちな患者を励まし、目標に向かうモチベーションを持続させるためである。

こうした数々の努力により、貴子のクリニックは徐々にその勢いを増した。その勢いというのは、提携先である理恵のクリニックでさえその地位を脅かされる事を恐れる程であつた。勿論貴子にはそんなつもりは毛頭ない。自信の仕事によつて患者が精神的幸福を得る手助けがしたい。その一心であつた。それが言わば貴子の精神的幸福であつたのである。そういう貴子の志が、恐らくは患者にも伝わっていたのであろう。一度貴子のクリニックを訪れた患者の中に、少なくとも診察への不満を理由にして離れていく者はいなかったし、貴子のクリニックに新規で訪れる患者はうなぎ上りに増えていった。そうして貴子がクリニックを開業してから五年の月日が流れた。

その頃になると、貴子は多忙を極めていた。ある夜、診察が終わり、貴子が一人でクリニックに残り雑務をこなしていた時の事である。真つ暗なクリニックの中、貴子は手元の明かりだけで書類を眺めていたが、ふとその目を止めた。どうやら疲れが出て来たらしい。貴子は大きく溜め息をつく、立ち上がって窓から外を眺めた。が、外は既に真つ暗で何も見えなかった。代わりに窓ガラスに映つた自分の姿が見えた。

（歳を取ったわね…）

貴子は既に四十歳であつた。若々しかった貴子も、さすがに老いを感じずにはいられなかった。窓に映る疲れた表情の女は、既に中年と言つて良かった。思えば智彦の家を出てから八年間、脇目も振らずに走り続けて来たのである。貴子はその道のりをぼんやりと思い返していた。すると、不意に智彦や淳一の顔が浮かんた。

（智彦、今頃どうしているかしら）

智彦とは離婚して以来、一度も連絡を取っていない。歳のせいか、別れた夫が何やら恋しい様な気分であつた。

（淳一…）

貴子は幼き日の淳一の姿をも思い起こした。

（淳一、生きていれば今頃十六歳ね。高校生だわ）

それを思うと、いつの間にか貴子の頬に涙が伝う。

（淳一…、智彦…）

彼らは記憶の闇の中で微笑む。それは闇夜に咲く月見草の様に物悲しい光を帯びていた。貴子の顎に涙が露となつて落ちる。

（私、元気でやってるわ）

こみ上げた感情で貴子の喉仏が苦しそうに震えている。何故泣くのか、貴子自身にも分からなかったが、それは悲しみの涙ではなく、心をえぐる様な痛みと共に全身から吹き出る様な涙であつた。

（私、これで良かったのかしら？）

心中そう呟くと、貴子はこらえきれずに嗚咽した。大粒の涙とともに貴子はその場に崩れ落ちた。一人の女医が泣き明かした一夜を知る者は、誰一人いない。

第十二章

次の日には、貴子は寝不足をものともせず、診療に勤しんでいた。たださすがに疲れが残っているのか、気分は優れない。こうして日々の業務に忙殺されている事が貴子の救いであるかも知れなかった。その時の貴子にはもはや仕事にしか精神的幸福を得るようすがはなかったのである。それは一つには自分の存在価値を仕事にのみ発見できたという事、もう一つには仕事に忙殺される事により余計な事を考えずに済むという事であった。しかしこの日はそうもいかない事件があつた。それは診療時間も終わりに近づいて来た頃であつた。

「先生、最後の患者さんです」

スタッフが貴子に声をかけた。

「そう、じゃあ入って来てもらつて」

貴子がそういつてしばらくした後、診察室に若い男が入つて来た。もつともこの頃になると貴子のクリニックには男性も多く訪れる様になっていたので、これ自体は珍しい事ではなかった。

「こんにちは」

若い男は頭を下げた。

「こんにちは。お座りになってください」

貴子がそういつて男の顔を見ると、何だか見覚えのある様なない様な、そんな顔であつた。色が黒く、少し目がきついが、落ち着いた風貌である。すると男は急にこんな事を口にした。

「先生、お久しぶりです」

「は？」

貴子は突然の出来事に、男の顔を凝視した。

「覚えていらつしゃいますか。私です。青木です」

その瞬間貴子は雷に打たれた様な衝撃を受けた。忘れもしない、貴子が淳一の為に報復した当時のあの小学生である。貴子はその風景が歪む様な衝撃に、言葉を失った。

「先生、ずっとお会いしたかったんです」

男がそういうと、貴子はやっと我に返り、

「お帰りください…」

と、男から目を逸らし、震える声で言った。

「先生、私の話を聞いてください」

「帰ってください！」

貴子は再度語気を強めて言った。貴子はもはや青木に腕力では敵わないだろう。貴子はただ下を向いたまま肩を震わせている。だが青木の発した次の一言で貴子の震えがぴたりと止まった。

「私の母は、あの後自殺しました」

貴子ははっとして青木を見上げた。

「私はあの頃、両親に過剰な期待をかけられ、そのプレッシャーに苛まれていました。しかしどう努力しようにも淳一君には勝つ事が出来なかったのです。私は情けないやら両親に申し訳ないやらで次第に追い込まれていき、終いには淳一君を疎ましく思う様になりました。そこで私は冗談半分であの計画を仲間に打ち明けました。その時は誰も相手にしないと思っていたのです。ところが周りは一斉に私に賛同し、あろう事か上級生にまでその計画が広まっていたのです。私は恐ろしくなり、引っ込みが付かなくなりました。そして私とその仲間は事に及んだのです。あの事件の後にも、私が発案者という事で、カメラを持たされました。私は恐ろしくて仕方がありませんでした。夜も眠れませんでした。しかしそこに先生が現れ、そんな日々を決着をつけてくれたのです。あの後私は退学処分となり、公立の小学校に編入しました。しかし私の母は私に失望し、自殺してしまつたのです。私は深い悲しみとともに、自責の念に苛まれました。私のせいで母が死んでしまつたと。しかもその時に私は淳一君の死をも知りました。私はその時に、自分も命を絶つべきだと思いました。ただ私にはその勇気がなく、実行には至りませんでした。そうして私は他人と接する事が恐ろしくなり、学校でも孤立した状態でした。そんな私は酷いいじめに遭いました。私にはそれ

が当然の報いである様に思われ、暫くは耐えていましたが、遂には不登校になりました。そんな時に私は先生の事を思い出しました。もし先生の様な大人がいてくれたら、私は学校に通い続けられたのではないか。私をいじめた連中に制裁を下してくれていたのではないかと、私は考えました。私は今、高校に行かずに働いています。私の行いが許される事はありません。私は淳一君を殺してしまったのです。私に弁解の余地がない事は分かっています。ただ、私がいじめられていた時にも、先生の様な正義が現れてくれればどれだけ良かったか。そういう正義を見せてくれた先生が、今も私の心のよりどころなのです。先生に感謝の言葉を言いたい。そして改めて謝罪したいのです」

青木は訴える様にそう言うと、真剣な眼差しから一滴の涙をこぼした。

「お帰りください…」

貴子は、今度は力なくそう呟いた。

「突然にすみませんでした。では失礼します」

青木はそう言うと、涙を拭いてすっと立ち上がり、毅然と帰っていった。この時には、貴子の頭の中は真っ白であった。青木が帰った後、スタッフが診察室に来て

「先生、本日の診察は終了です」

と言ったが、貴子には返事すら出来なかった。

だが暫しの時間が過ぎると、貴子には不意にある勇気が湧いてきた。それは過去の不幸な自分と決別する勇氣である。

（そうよ、私は悪くない）

貴子は過去の自分を肯定した。

（私は何も悪い事をしていない。正しい事をしただけ。私はこれで良かったのよ。確かに子供を亡くし、夫と別れた。だけど結果的に私は幸せを掴んだじゃない）

「結果的には」という言葉で全ての辻褄を合わせ、過去の不幸に目をつむったのである。

しかしその刹那、貴子の体が熱を帯びた。かと思うと、その体が真つ赤に腫れ上がり、この世のものと思えぬ程の痒みを発した。皮膚という皮膚、爪の裏、体内の粘膜、骨の髄、脳の奥までがその痒みに冒された。貴子はその場にうずくまり、白衣の上から胸元に爪を立てた。そして人間の出し得る声の中で最もグロテスクな悲鳴を挙げ、喘ぐ口元からこう漏らした。

「幸福が、幸福がむず痒い！」

精神的幸福とは、過去の不幸に拠って立つ者にのみ追求を許されるものであった。精神的幸福にはそれによって埋められる過去の傷が必要だからである。それはまるで貴子が初めて感じた酒の味のように。ところが貴子は自己の不幸を肯定した。それは言わば負の自傷行為であった。その瞬間に、貴子が今まで求めてきた精神的幸福は磁石の針が振れる様に物質的幸福に転化したのである。その証拠に、貴子が「結果的に私は幸せを掴んだ」と思った時の「幸せ」とはもはや他人との比較によって成り立っていた。貴子の痒みはその表れであつたろう。

貴子はやろめき、狂気の化身のごとく壁に頭を打ち付けた。スタッフが貴子の悲鳴を聞いてそこに駆けつけた時には、貴子は頭から血を流し、気を失って倒れていた。

最終章

気が付くと、貴子は病室のベッドの上に寝かされていた。頭には包帯が巻かれ、まだ少し痛んだ。が、皮膚の状態は何事もなかったかの様に元に戻っていた。クリニックのスタッフの一人が起き上がろうとする貴子に声をかけた。

「あ、先生、気が付きましたか？ 安静にしていってください。傷はまだ癒えていませんから」

貴子は微笑んでスタッフの手を制した。

「大丈夫よ、大した事ないわ」

そう言うと、貴子はクリニックの心配をした。

「クリニックは今どうなってるの？」

「ええ、今は一時休業という形で閉めています。理恵先生も既に手一杯で、とても手が回らないと仰っていたので。予約されていた患者さんには連絡を入れて、謝罪をしています」

「そう。早く退院して仕事に戻らないとね。お客さんを待たせる訳にもいかないし」

「でも先生、ご無理はいけませんよ。きつとよっぱど疲れていらっしやったんですよ。先生、壁に頭を打ち付けて倒れていらっしやったんです。少し休まれた方がお体にもよろしいですよ」

「ありがとうございます。じゃあお言葉に甘えてそうさせてもらうわ。皆には私の事は心配ないって伝えておいてちょうだい」

「はい。では先生、私食事を取ってきますから」

スタッフはそう言って病室から出て行った。一人になると、貴子はベッドに仰向けになり、天井を見つめて溜め息をついた。天井の模様様が、自分を嘲る皮肉な薄ら笑いに見えた。貴子は考えた。

（私は幸せになんてなれないのかも）

結局、幸福とは自分にとってこの上なく求めることの難しいものであった。勿論、この先仕事を続けていく過程で、自分は物質的にも

精神的にも豊かになつてはいくだろう。しかしそれは幸福ではあり得ず、単なる癒しに過ぎないのだろう。生きる事の苦痛を癒す為の手段としての豊かさ。しかしそれに振り回されて生きる事もまた苦痛である。本当のところ、幸福などあり得ないのではないか。強いて言えば生きる事の苦痛から解放される事が唯一の幸福かも知れない。その幸福を得んが為に人間が故意に、あるいは自然に行う自傷行為。それは死である。物質的幸福を傷つけ精神的幸福を得て、その精神的幸福が知らぬ間に物質的幸福に転化してはまた自傷行為を行う。そんな虚しいサイクルを繰り返しながら、人間は着実に死という真の幸福に向かつている。

（じゃあ何の為に生きるの？）

そこまで来ると、貴子にも答えが出なかった。病室の窓から憂鬱な空を一瞥して、貴子は寝返りを打った。水を得た様に清らかな肌が布団に心地よく擦れる。貴子は再び女になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6117s/>

自傷癖

2011年4月24日08時25分発行